

Q-1 南三陸町戸倉波伝谷地区 2012年2月26日(日)

報告者名	政岡 伸洋	被調査者生年	1954年(男)
調査者名	政岡 伸洋	被調査者属性	養殖業、元契約講長、その他さまざまな役職に就く
補助調査者	岡山 卓矢 遠藤 健悟 大沼 知		

津波の被害について

話者は、前日に葬儀があって遅くまで出ていたので、地震の時はちょうど昼寝中だった。揺れが強く、テーブルにつかまりテレビを押さえたりしたが、壊れたのは食器程度で、瓦も落ちておらず、それほど被害は出てなかった。津波が来ると思ったので、すぐに港に向かい、大きい船と小さい船2艘で沖に出た。沖に船を出した人は、その時海で仕事をしている人がほとんどで、わざわざ陸から出たのは2~3人くらいだった。

沖へ出て行ったら、そこに津波が来た。これまでの経験だと、沖へ出ればじわっときて波の上下で船がゆらゆらと揺れる程度であるが、今回の津波は、最初はじわっときたが、その後は台風や低気圧の時化のときのように、ケタ違いでこういうのは初めてであった。チリ地震津波の際にも今回同様に竹島まで潮は引いたが、チリ地震津波の際には走っても逃げられるくらいの速さだったが、今回はその勢いが違っており、映画でも見ているようであった。

沖では、がれきだらけになっていたため、あまり動きが取れなくなってしまった。最初は大きい船に乗っていたが網がスクリューに絡まり動かなくなったので、小さい船に乗り換えて波伝谷漁港まで行くと、再び津波が来て一気に波とともにカキ剥き場辺りから堤防を越えて398号線沿いに流され、ヌマカ辺りの堤防を越え、滝から落ちるような感じで再び海に戻った。この時、集落内は電柱の高さくらいまで水が来ており、屋敷林の上のところがるうじて水面から出ていた程度で、あとはもう何もなかった。これが17時頃であった。

その後、神割崎辺りに一度引かかったが、今度は反対方向に流され、2回くらいどこかの島に引っ掛かったりしながら気仙沼の手前の岩井崎近くまで流された。すると、工事用のクレーンがついた台船があったので乗り移り、サロンのような部屋があって鍵がかかっていたので窓を壊して中に入り、ガスの火で暖をとったり、そこにあったジュースを飲んだりして一晩をしのいだ。

翌12日は、夜明け前にまた南の方へ流され、ちょうど波伝谷に近付いた辺りで夜が明けた。すると、魔王神社の岬に人が見えたので上陸し、そこに合流した。周りを見ると、高台など3か所くらいにみんなが避難しているのが見えた。そして、6-7時頃に海洋青年の家(志津川自然の家)へ向かい合流した。それぞれの場所からも集まってきた。

話者は、堤防のところに駐車し、車の中に携帯電話も置いてきたので、誰とも連絡が取れなかった。今回の津波では、水深30メートルの沖まで出たのにスキーのように押し流されたが、50メー

トルのところまで出た人は流されることはなかったようである。テレビなどで学者が津波の高さを言っていたが、見たところそれ以上の高さだった。

波伝谷で亡くなったのは、一度避難してから車や通帳を取りに戻った人が多かった。また、声をかけても動こうとしなかったおばあさんも亡くなった。ある中学生は、いったん学校に避難したが、そこで津波に会い、波に追いかけられ逃げたが飲まれてしまったという。中学校ではそういった生徒がかなりいたそうである。指定避難所も津波を受けたし、夜に津波が来ていたら、たいへんなことになっていた。

海洋青年の家での生活

海洋青年の家は宿泊施設なので、食べ物などが多少残っていたが、13日からみんなでジュースを拾ったり、津波で流された車からガソリンを集めたり、また食べ物や水の調達をした。水は、最初は沢の水を使っていたが、1週間ぐらいすると津の宮の簡易水道が使えるとわかったのでこれも10日くらい利用し、さらに消防ポンプ車で海洋青年の家の屋上にあるタンクに水をくみ上げるようになると、便所も使えるようになった。電気は1か月以上こなかった。道路は、破損とがれきのため全く使えなかったので、山をまわったり、折立までは船も使った。

海洋青年の家は避難所だったので、自衛隊や役場職員が来るのは早く、震災後1週間ほどで最初の自衛隊のヘリがきた。この頃には自分らでできることはやろうという雰囲気になっていた。薪拾いや朝のごみ捨て、洗濯、料理などの担当を決めてやった。洗濯は下の沢で、また料理等は女性がやっていた。また、グランドには自分たちが見つけた遺体置き場に使っていた。これらの作業の役割分担については、最初は契約講長が音頭をとっていたが、役場の担当者が来てからは、食事係、食事探しといった役割が分担され、選抜したメンバーで行うようになっていった。ここには300人ぐらい避難していたが、最初は波伝谷の人だけが動いていた。他の部落の人も何人かは来たが、そこに残っている人もいたようなので、それほど多くはなかった。寝る場所は体育館で、毛布もあった。

大部分が波伝谷の人だったので、何事もスムーズにいった。看護師もいて、病人への対応も早く、役場から衛星電話が運ばれ、電話もつながるようになった。

自衛隊より先に米軍が来て、ドラム缶で燃料を支援してくれた。アリーナなどは、人が多くて物資の配分や仕事の分担に手間取ったそうであるが、ここでは早くに体制をつくることができた。流す水はほとんど流されたが、津の宮から向こう側には何軒か家が残っていたので、その頃には海洋青年の家が支援物資の中継所のようになり、話者も、地震後1週間ぐらいから物資分担を担当した。

避難所での噂話

その後、海洋青年の家が避難所に指定されず、物資も来なくなるといううわさが広がり始めた。建物にひびが入り、避難所の基準を満たさないとの話だった。300人以上いるから大丈夫だと話す人もいたが、4月に入るとこうした噂を聞いて登米や鳴子等へ移る人も出始めた。ここでは電気や水もなく不安があったが、登米や鳴子ではそれがあったので。また、志津川の町の方では南三陸町がホテルを用意した、早くしないとなくなるという話もあったことも大きかった。

その後仮設住宅の建設が始まったので、抽選で他所の人も住めるようになったが、波伝谷ばかり300人が揃ったまま建設が始まっていれば、せいぜい戸倉くらいの範囲でまとまって住めたかもしれないと話者は思っているそうである。

また、女川原発が爆発するかもしれないという、どこから出たかわからないような噂も流れ、その際に放射能を防ぐためと言って、窓や入り口のところに幕を張ったこともあった。車でテレビなども見たが、福島原発のニュースしかなく、女川原発がどうなっているかわからなかったためだという。

仮設住宅へ

話者は、5月10日に、1回目の抽選で海洋青年の家のグラウンドにある仮設住宅に入ることができた。この辺りでは最初の仮設住宅だったので、自分だけが避難所から出づらかったし、仮設にいれば食料などが自己負担になるので、しばらく入居しなかった。

仕事の開始とがれきの撤去作業

仕事をはじめたのは、5月から6月くらいである。残った船で、まず海の調査の仕事やがれきの撤去作業が始まった。がれきの撤去作業は、漁協の指導のもとで行われ、海中および沿岸部に流れ着いたものが対象であった。話者は、漁協の役員を務めていたことから、5月頃から始めていたが、役員以外の者は6月ごろからこれに従事した。この頃までは、漁協も誰の船が残っているかわからなかったという。また、残った船も港が完全に破壊されているため、沖に停泊させていたが、3月後半にあった時化で壊された人もいた。なお、がれきの撤去作業は12月頃まで行われた。

これと並行して、7月に流れてきたメカブを利用し、ワカメの種をつくったり、カキ養殖再開の準備も始めていった。時期を逃すと、収穫できなくなるからである。養殖期間の短いワカメをまず最初に始めた。

養殖業の再開と「がんばる漁業」

1月に入ってから水産庁の復興支援策である「がんばる漁業」がはじまった。これは、国が3年間管理して（実際は県であるが）共同作業で行い、かご・網といった機材や船などの費用も国や県から補助してもらえるため初期費用がかからず、この事業が終わる3年後にはそうした道具類も譲ってもらえることになっている。戸倉として、カキ・ワカメ・ホタテを対象に、共同で水揚げし、それを国が買い取って給料を出すという仕組みになっており、赤字の補てんも行うことになっている。これらの品目は、今までやってきたものだからである。「がんばる漁業」の受け入れに際しては、これ以外にもいくつかの選択肢があったが、漁業組合で話し合って決定した。なお、これに参加するのは震災以前からやってきた人で、家族で従事することも可能であるが、1人だけが正社員となり、あとはアルバイト扱いになる。今年度は期間が短いということでワカメをやるうということになった。カキは、成長は早いそうだが、剥く施設がないので、まだ出荷できない。ギンザケに関しては、これとは別であるという。この「がんばる漁業」に関しては、2月20日付の『水産新聞』に詳しい。

2月27日がワカメの刈り入れであるが、養殖しているのは、震災以前と同じ場所である。作業の場所は、本来ならば波伝谷漁港を使うはずであるが、損傷が激しく地盤沈下しており、一部をかさ上げして船がつけられるようにはしたが、船着き場以外は水に浸かっており、県の管理ということもあって、道路部分の管轄も違うなど、工事がなかなか進まず、仕方がないので町が管理する漁港（震災前に小山漁業部が使用していた場所）を使用している。ただ、機械の調子が悪く、なかなかうまくいかない。このほか、ワカメを仙台の人に贈ったが、以前ほど喜ばれず、不安もあるという。

湾の反対側ではこれに参加せず、5~6人で組合のようなものをつくり、再開したところもあるが、話者も一緒にやろうという人がいればそうしたかったという。1人でもやろうと思えばやれるのだが、戸倉として「がんばる漁業」をやっているのだから、果たして個人に養殖場所を貸してくれるかわからなかった。また、震災前は組合へ卸す分もあれば個人で売る分もあり、自分のペースで働けば働くほど収入になったが、「がんばる漁業」は初期費用がかからない反面、いくら働いても一律の給料制となっており、戸惑いも隠せない。このような共同作業を前提とした民間特区みたいにしてしまおうという話は以前からあり、こっちの方がいいと思う人もいただろうが、震災復興を契機に漁協として採用したわけだが、やりたいようにやりたい人にはどうもなじまない、漁師ならみなそう思うのではないかと語っていた。

なお、漁協の役員は組合代表、運営委員（理事）、小委員（部落代表）からなり、運営委員・小委員ともに部落から1名出すことになっている。話者は、12月いっぱいまで運営委員であったが、「がんばる漁業」をめぐる上と意見が合わず、任期途中であったが辞表を出したという。

この「がんばる漁業」を採用しているのは、戸倉のほか、ノリの塩釜と雄勝の3組合だけで、志津川はがんばる漁業とは別に、地区単位の組合と養殖品目単位の組合の2種類できた。十三浜は個人で再開しているが、補助の額が少ないことと、それが後払い制であることから、なかなか難しい状況にある。その点で「がんばる漁業」は、資材の補助等がすぐに出るのは良い。しかし、個人個人で感じ方は違うようだが、時間を決められ働くことには抵抗感があり、あまり採用するところがないのは嫌だからではないか。ただ、家を今後建てる資金の工面を考えると迷いどころだ。これを採用した結果が良かったかどうかは、3年後になってみないとわからないという。

仮設住宅と自治会

海洋青年の家の仮設住宅では、一つの自治会をつくり、自治会長を設けている。きっかけは、手狭であった駐車場を広くするため、仮設住宅の総会を開いたところ、町役場の担当者がやってきて自治会をつくるように言われたからである。6~7月頃のことで、派遣されてきた役場の応援職員にたびたび個人的に相談したが、上へ話を通さないのだから、話者の名前で総会を開き、一軒当たり1台分を確保しようと話し合う予定だった。

棟ごとに班長がいるが、任期も1か月という棟もあれば3か月というところもあり、バラバラである。自治会長はその互選で選ぼうという話もあったが、やりたいという人がいて、その人が担当している。ここは歌津や長清水の人もおり、現在の自治会長は長清水の人である。自治会長のところには、町からチラシが来るなど、情報の伝達が主な仕事となっている。

これとは別に、区長もいる。震災以前は波伝谷上区・下区それぞれにいたが、1人が辞職した

ため、今は波伝谷で1人だけとなっている。ただし、震災前からの区長の仕事は、現在仮設住宅の自治会長がやっている。

このほか、波伝谷仮設住宅もあるが、ここは波伝谷の人だけで構成されている。3~4人ほどの私有地であったが、この場所を提供し希望者が住んでいる。波伝谷ではいちばん最後にできた仮設住宅である。

契約講総会の開催と集団移転

契約講は当初休講ということになったが復活し、3月4日に契約講の総会が開催される。これは講長経験者で構成される顧問の数名が話している中で決まった。集団移転の話になる可能性もあるが、それならば区長より契約講の方が段取りもできるだろうということで開催されることになった。このまま進むと移転先の高台では1軒100坪しかもらえない。そのままだとゴルフ場跡地になって、海から離れてしまうことから、波伝谷単位でやれば国へ申請できるので、人数を集めて陳情し、地権買い上げを国にしてもらって、海の近くへ移転するため、まずはっきりした人数を出そうということである。船が見えるところだと安心するし、元いたところの近くにも住みたい。ただし、すでに10人くらい出て行ってしまっているし、移転先の造成から家を建てるまで年限がきられる可能性もあるので、町営住宅を希望する人もいて、何人残るかという感じである。その手続き等について、町役場に尋ねに行くが、国や県でもはっきり決まっていないので、困るという。

また、若い人たちが獅子舞をしようということなので、その話も出るだろうとのこと。今は仮設住宅になっているので、戸倉中学校、波伝谷、海洋青年の家の3か所くらいになるのではないかと思う。

ボランティアについて

ボランティアが来るようになったのは、4月の中頃だった。最初の頃は、ボランティアと一緒に寝食をともにしていた。本来、ボランティアは自分の食事は自分で準備するものだが、中には寝食するだけのホームレスのような人も混じっていた。最近は、そういうこともなくなり、YMCAや企業、またバスツアーで来るボランティアが多い。長くいるうちに仲良くなり、志津川の物がほしいと言えば送ってあげたりする関係になった人もいる。中には、専門的な知識や技術を持っている人もいて、電線やチェーンソー等の機械を修理してくれたりした。また、水はかぶらなかったが、くたびれた神社の太鼓も、長野のまつり工房からきた人が無料で直してくれた。皮を張り替え塗りなおしてもらったのだが、太鼓を持って行ったまま連絡がつかなかった時期があって、怪しいのに渡してたいへんなことになったと思ったりもしたと、話者は笑いながら話していた。